

會 報



令 和 7 年 度

(第45号)

東京電機大学教職校友会

東京電機大学教職校友会 会報 第45号

CONTENTS

- 3 会報第45号に寄せて 会長 丸茂 聡
- 4 特集 学校紹介・教育実践紹介
 - 4 東京都 遠藤 圭輔（守屋育英学園 関東第一高等学校）
 - 5 埼玉県 鈴木 貴大（私立山村学園高等学校）
 - 7 神奈川県 知野 広征（藤沢翔陵高等学校）
 - 10 栃木県 高松 秀和（栃木県立宇都宮工業高等学校）
- 12 令和6年度・7年度の活動について
- 13 令和7年度 顧問・役員・幹事一覧
- 14 令和7年度 教職校友会会員数
- 15 教職校友会会則
- 16 会費納入のお願い

<表紙の題字「会報」は、初代学長丹羽保次郎先生の揮毫によるものです>

— お知らせ —

- *学校別の会員名簿は、個人情報保護の観点から掲載をしていません。
- *会員への問い合わせ先等必要な場合は一般社団法人東京電機大学校友会にお問い合わせ下さい。教職校友会の定める「個人情報保護に関して」（平成17年制定）及び一般社団法人東京電機大学校友会の定める「個人情報保護規則」（平成30年制定）により対応します。
- *会員への当会からの連絡はご自宅住所宛を原則とします。住所変更、勤務先変更等がありましたら「一般社団法人東京電機大学校友会」にご連絡ください。

会報第45号に寄せて

東京電機大学教職校友会会員の皆様には、日頃から本会の活動に御理解と御協力を賜り、誠にありがとうございます。

さて、現在第一線で活躍されている皆様においては、教職に携わる者として日々大きな責任を感じていらっしゃるのではないのでしょうか。あくまでも体感ではありますが、コロナ禍の影響はいまだ大きく残っていると感じています。それは体力的な面もさることながら、心の面への影響が大きいように思います。コミュニケーションをうまくとることができないという状況は児童・生徒だけではなく、社会全体に広がっており、いまだ回復していないように感じられます。

そのような中で、現場の先生方はいじめの早期発見や生命にかかわる事故の未然防止など、児童・生徒の変化にいち早く気付く力が求められます。しかし、児童・生徒自身も自らを表現することが困難な状況になっており、変化そのものが見えにくくなっています。そのため、学校では児童・生徒にSOSの出し方をまず教え、そうして出てきたSOSを見つけることとなります。相手と対話し、人間関係を作り、変化に気付ける環境を整えるには膨大な時間が必要となります。

更には、学習の面でも新しい対応が必要になりました。学習指導要領に示された主体的・対話的で深い学びを実現するためには、これまでのように自らの専門分野に特化した教育を行うだけでは対応が困難です。教員自身が専門外の教科の内容を意識し、様々な視点から物事を見る力を養い、教科横断的な学習をする力が必要となります。また、「探究」を進めていくためには教員が一方向的に教えるのではなく、児童・生徒自身に考えさせ、気付かせる力が求められます。これは、考え方としては理解できるものの、児童・生徒の実態に合わせて、効果的な働きかけを行うためにはどうすればよいのか。そのノウハウは教員自身が試行錯誤を繰り返しながら学んでいる最中なのではないかと思います。

このように、教育の環境は厳しさを増している状況ですが、そのような中でも志を高く持った有為な人材を育成することは重要です。毎年大学から示されている「教職校友会卒指定校推薦制度」に基づき、本会から将来有望な人材を大学に推薦することは母校の発展に寄与するとともに、工業教育や理数教育を担う次世代の教員を輩出することにつながるものと確信しています。

本会の目的は、大学と校友会との緊密な連携のもと、相互の発展に協力し、会員の資質向上と親睦を図ることにあります。様々な力量が求められる現在、全国で多くの会員が意欲的に活動していることをこの会報を機会として知っていただくとともに、本会を会員相互の交流の場として、既に御退職された諸先輩方の経験や現在活躍されている皆様の工夫を知る機会としていただければ幸いです。

最後になりましたが、本会の運営に当たり、多大な御尽力を賜っております、校友会をはじめ幹事の皆様に、改めてお礼を申し上げます。

今年度もどうぞよろしく願いいたします。

令和7年7月吉日

東京電機大学教職校友会
会長 丸 茂 聡

特集 学校紹介・教育実践紹介

会報第 45 号の特集には、4 名の会員からそれぞれの学校における特色ある教育の報告が寄せられました。

東京都

関東第一高等学校 創立 100 周年： 歴史と未来への展望、そして未来型教育への挑戦

守屋育英学園 関東第一高等学校 教諭

遠藤 圭輔

■ はじめに

2025 年 4 月、関東第一高等学校は創立 100 周年を迎えました。本稿では、100 年にわたる歴史、未来への展望、そして本校を特徴づける教育活動、特に ICT を活用した未来型教育についてご紹介します。

■ 百年の歴史と揺るぎない教育理念

1925 年の創立以来、関東第一高等学校は、創立者である守屋荒美雄先生の遺志「英知・聡明・平和を尊び社会に敏感に反応し、国際社会で活躍し生涯学び続ける生徒の育成」を教育理念として、そして「貫行」の校訓のもと、教育活動に邁進してまいりました。渋谷実理事長、乙幡和弘校長をはじめとする教職員一同は、未来を担う生徒たちの育成に、弛まぬ努力を続けています。

100 年の歴史の中で、関東第一高等学校は幾多の時代の変化を経験し、常に教育の質を高め、数多くの優秀な人材を社会に輩出してきました。単なる歴史の回顧にとどまらず、100 周年を新たな出発点として、未来への展望を明確に示すべく、教育内容の改革、教育環境の整備に積極的に取り組んでいます。その取り組みの一環として、新校舎の建設も進んでおり、2026 年度に完成予定です。

■ グローバル化とテクノロジーに対応する未来型教育

グローバル化とテクノロジーの飛躍的発展が加速する現代において、本校は変化の激しい時代を生き抜くために必要な資質・能力を生徒に育成することを目指しています。その取り組みの一環として、2023 年には Google Workspace for Education の活用事例校に選出されました。これは、本校の ICT 教育への積極的な取り組みが評価された証です。

Google Workspace for Education の導入により、生徒たちは場所や時間に縛られない学習スタイルを

手に入れました。Google Classroom を活用した双方向型の授業では、生徒からの質問や意見がリアルタイムで共有され、教師と生徒間の活発なコミュニケーションが促進されています。Google Meet によるオンライン授業は、コロナ禍における教育の継続性を確保する上で大きな役割を果たし、学校外の施設の方とのコミュニケーションや欠席生徒への対応など、柔軟な学習環境を提供しています。

さらに、Google スライドやドキュメントを用いたプレゼンテーションやレポート作成、グループワークを通して、情報活用能力や協働学習能力の向上が図られています。生徒たちは、各自の役割を明確にし、意見を交換しながら課題に取り組むことで、主体性と責任感を育てています。また、プログラミング教育にも力を入れており、ICT 教材の利用による、生徒一人ひとりのレベルに合わせた指導を行うことで将来、AI やデータサイエンスといった分野で活躍できる人材育成を目指しています。近年注目されている AI 倫理教育にも取り組み、テクノロジーの活用と社会責任の両面を理解できる人材育成に努めています。

本校の ICT 活用は、単なるツール導入にとどまりません。教育改革の重要な柱として位置づけられ、AI やデータ分析といった先端技術も積極的に取り入れています。特に、2500 名以上の生徒の成績データを Google Apps Script (GAS) を用いて自動的に分析し、進路指導や 2 年進級時のクラス編成に活用することで、教育の最適化を図っています。このデータ分析に基づいたパーソナライズドラーニングの実現を目指し、生徒一人ひとりの学習状況を詳細に分析し、個別最適化された学習支援を提供することで、より効果的な学習をサポートし、個々の能力を最大限に引き出していきます。さらに、学習進捗状況を可視化することで、生徒自身も自身の学習状況を把握し、主体的に学習に取り組むことができるよう支

援しています。



■ 進路指導の充実とコース改革

生徒の多様な進路希望に応えるため、2025年度よりコース名称も変更しました。従来の特別進学コースは「ハイパーコース」、進学Aコースは「アドバンスコース」、進学Gコースは「アグレッシブコース」、スポーツコースは「アスリートコース」と改称し、それぞれのコースで教育内容、カリキュラム、指導方法を見直し、生徒の能力を最大限に引き出す改革を進めています。GASによる成績分析は、各コースの生徒の特性を把握し、より効果的な指導計画を立案する上で重要な役割を果たしています。また、進路指導においては、大学進学を中心として多様な分野への進路選択をサポートする体制を整えています。キャリア教育の一環として、企業や大学との連携を強化し、生徒の職業理解を促す取り組みも行っています。

■ 部活動の活躍と「貫行」の精神

部活動においても、生徒たちは「貫行」の精神を体現し、素晴らしい活躍を見せています。硬式野球部は2024年の夏の甲子園大会で準優勝、競技かるた部は2年連続団体戦優勝と輝かしい成績を収めました。これらの成果は、本校生徒の潜在能力と努力の証であり、大きな誇りです。部活動を通して培われる協調性や責任感なども、本校の教育理念に沿った

重要な要素となっています。

■ 100周年記念事業と未来への展望

4月30日には、江戸川区総合文化センターにて創立100周年記念式典を開催しました。関東第一高等学校は、創立100周年を新たな出発点として、教育理念をさらに深く追求し、未来社会を担う人材育成に邁進してまいります。今後、ICTを活用した教育の更なる高度化、パーソナライズドラーニングの充実、そして生徒一人ひとりの個性を尊重し、可能性を最大限に開花させる教育環境の整備に力を入れていきます。常に変化を恐れず、未来を見据えた教育活動を展開することで、社会に貢献できる人材育成を目指し続けます。国際交流にも積極的に取り組んでおり、昨年度の8月から10月にかけてオーストラリアのCCGSとの交換留学のプロジェクトを成功させ、3月15日(土)に行われたパースプロジェクトではパース日本祭りではチア部は甲子園応援やオリジナルパフォーマンス、留学組は祭りのボランティアスタッフとして大活躍しました。



本校は、これからも「英知・聡明・平和を尊び社会に敏感に反応し、国際社会で活躍し生涯学び続ける生徒の育成」という教育理念を胸に、未来を担う人材育成に全力を尽くしてまいります。100年を超える歴史と伝統を礎に、新たな100年へと歩みを進めていきます。

埼玉県

山村学園高等学校 100年の伝統と、未来への挑戦

私立山村学園高等学校 教諭

鈴木 貴大

■ はじめに

埼玉県川越市にある山村学園高等学校は、1922年に創立された、歴史と伝統を誇る私立高等学校です。

2022年には創立100周年を迎え、これまでの歩みを振り返るとともに、これからの時代を見据えた新たな教育の在り方を模索し続けています。校訓である

「質実・英知・愛敬」を教育の軸とし、生徒一人ひとりの個や可能性を大切にしたい学びを提供しています。男女共学化を実施した2008年度以降は、より多様な価値観が共存する学校として発展を遂げてきました。ここからは、山村学園高等学校の教育の特長、コースの構成、日々の学校生活、学力向上のプログラム、そして部活動の様子についてご紹介させていただきます。

■ 生徒の可能性を広げる、3つの進学コース

本校では、生徒一人ひとりの目標や学力、将来像に応じた3つのコースを展開しています。それぞれのコースは、学習内容やサポート体制が分かれており、個に合ったスタイルで学べる点が魅力です。

・特別選抜 SA コース

難関国公立大学、早稲田・慶應・上智・東京理科大学などの最難関私立大学への現役合格を目標とする、ハイレベルな進学コースです。このコースでは、基礎力の強化と応用力の育成を両立させるため、1年次から週3回の7限授業を導入している他、朝・放課後・長期休暇中には「YGゼミ（山学ゼミ）」を実施しており、日々の授業に加えて受験対策に特化した講座を受けることが可能です。個別指導や補習も充実しており、教師陣による手厚いサポートのもと、志望大学合格を目指した学習環境が整っています。

・特別進学 EL コース

難関私立大学や、3教科型で受験できる国公立大学への進学を志す生徒向けのコースです。SAコースほどの学習負荷はかけずに、効率的な受験対策を重視したカリキュラムが組まれています。1年次は基礎学力の定着を目的にSAコースと同様、週3回の7限授業を実施しています。2年次からは文系・理系に分かれ、進路目標に合わせた選択授業が導入されます。少人数制の授業も多く、教員との距離が近いので、きめ細やかな指導が受けられるのが特徴です。

・総合進学 GL コース

将来の進路選択に幅を持たせたい生徒に向けたコースで、大学進学を中心に、短大・専門学校など、さまざまな進路希望に対応しています。授業は基礎学力の養成に重きを置いており、無理なく学べる内容となっています。2年次以降は進路希望に応じた選択授業が増え、徐々に専門性の高い学びへと移行していきます。

■ 全国レベルの実績を誇る部活動

本校では、多くの生徒が部活動に所属しており、文化系・運動系ともに活発に活動しています。全国大会出場や上位入賞の実績を誇る部も多く、目覚ましい活躍を見せているのが、以下の部活動です。

・ダンス部：全国大会出場経験が多数あり、表現力とチームワークを磨く場として高い人気を誇ります。

・バトン部：技術と美しさを追求するバトントワリングは、全国レベルの演技力を持つ精鋭が揃っています。

・硬式野球部：2024年のプロ野球ドラフト会議で、3年生のエース左腕・西川歩投手が読売ジャイアンツから育成5位指名を受け、契約を結びました。西川投手は、最速147キロの直球と多彩な変化球を武器に、埼玉県大会での活躍が評価されました。



この他にも、多種多様なクラブ活動が存在しており、生徒は自らの興味関心に応じて参加しています。部活動を通して得られる仲間との絆や達成感は、高校生活の大きな魅力の一つです。

■ インターナショナルプログラムの紹介

本校では、グローバルな視野を持ち、国際社会で活躍できる人材の育成を目的に、さまざまなインターナショナルプログラムを展開しています。英語力の向上はもちろん、異文化理解やコミュニケーション能力の養成にも力を入れております。その一部をご紹介します。

・ニュージーランド姉妹校へのターム留学

本校は、ニュージーランドの姉妹校「オンズローカレッジ」との交流を長く続けており、毎年1月末から3月にかけて実施されるターム留学には、最大10名の選抜生徒が参加し、現地でのホームステイと通学を通じて生きた英語を学ぶ場となっております。



・夏休み英語活用プログラム

夏休み期間中には、テンプル大学で実施されているプログラムに参加する他、本校でイングリッシュキャンプを行い、英語を活用する機会を積極的に取り入れています。

・イングリッシュルーム

放課後などにネイティブの教員と少人数で行う「イングリッシュルーム」では、プレゼンテーション

やディスカッション、会話練習を中心とした講座が行われています。生徒の関心に応じたテーマを扱い、実践的かつ楽しく英語を学べる環境が整っています。

・国際交流イベント

2025年5月には、台湾の「国立嘉科実験高級中等学校」の生徒と教員が本校を訪れました。川越市内の散策や本校の授業参加を通じて交流を深め、双方にとって有意義な国際体験となりました。今後も国際的なつながりを広げるイベントを継続的に行っていく予定です。

・1年間の英語学習講座

毎週土曜日に、1時間半ほど英語の4技能を高めるための座学の時間を設けています。大手進学予備校の講師を招き、受験に向けた準備を高校1年次から行っています。

■ 最後に：未来を見据えて歩み続ける学校

山村学園高等学校は、100年の歴史と実績をもとにしながらも、時代の変化に柔軟に対応する教育を展開し続けています。多様な目標に応じた学びが可能な本校で、多くの生徒たちが今日も希望に満ちた第一歩を踏み出しています。

神奈川県

哲学すること 問いをたてること 探究すること

藤沢翔陵高等学校 教諭

知野 広征

■ はじめに

1931年神奈川県藤沢市に創設された時宗総本山遊行寺を母体とする本校は、創立94年を迎え地元根差した商業高校として発展、地元では「スポーツに力を入れている男子校」「就職に強い商業高校」というイメージが強い高校である。

近年、コース再編とともに新たな取り組みに挑戦している。今回は本校で力を入れている「探究活動」について紹介したいと思う。

■ 学科・コース

【商業科】

本校商業科は2年次より、財務会計や原価計算を中心とした専門的な学びを行う会計コース、アプリ

ケーションの活用やプログラミングを学ぶ情報コース、実社会で通用するビジネス全般を広く学ぶ総合コースの3つのコースに分かれる。

最近では商業科が普通科の1コースに吸収され、聞こえが良いところだけ残す学校もあるが、本校では商業科目を堅実にしっかり学び、その上で地元企業や商工会に協力を仰ぎながら販売実習などを通して実戦経験を積んでいる。

【普通科探究コース】

本校探究コースは「得意分野探究コース」「文理融合探究コース」の2コースに分かれている。

得意分野探究コースでは「好きなこと」「得意なこと」を学びの起点とし、文理融合探究コースでは文理の壁を越えて横断的で実践的な学びを軸として3

年間かけて探究を行っていく。

■ 探究学習の過程

探究学習では課題の設定→情報収集→整理分析→まとめを基本サイクルとしており、この探究サイクルを回すために必要な基礎力から身に着けるカリキュラムが組まれている。

(1) まなびの OS

まなびの OS では外国人が日本語を学ぶ際に行う学習を応用し「読解」「聴解」「語彙」の3つの観点から日本語の能力を育てる学びである。

この中でも特徴的なのが「聴解」だ。国語版のリスニング学習のようなイメージを持っていただけると分かりやすい。国語の学びで文法や読解問題、質問を正しく理解し小説や評論などの長文から適切な答えを読み取れるかが求められるような問題に取り組むことはある。

しかし、コミュニケーションにおいて会話は重要であるにもかかわらず、会話の内容を正しく理解する力を学ぶ機会は多くない。書店でもコミュニケーションに関する本が多く並んでいる昨今の状況を考えると、日本語のリスニング力が今求められていることがわかる。このように国語だけでは足りない日本語力の向上を補うのが本学習である。

(2) 哲学対話

通常哲学とは私たちの「当たり前」の考えを疑い、深く考えることで物事の本質をとらえる学問であり、しっかり学ぼうとすると難しい。

哲学対話におけるテーマの実例

- ・無駄なこととは何か。
- ・約束は絶対に破ってはいけないのか。
- ・小学校は6年間なのに、なぜ中学と高校は3年間なのか。
- ・どうして授業中の飲食はダメなのか。
- ・なぜ男子校があるのか。
- ・歴史から何を学べるのか。

など

しかし、本哲学では、みんなと話し合いたいテーマ・問いについて、互いに受け答えをしながら探究を行う方法である。「なぜ勉強をしなければいけないのか」「好きになるとはどういうことか」というような事柄や感情、価値に関する問いについて、自分たちの体験や疑問に思ったことなどをテーマとして、お互いの意見や考えを投げ合う。

① 新たな問いとの出会い

授業やテストなどでは一方的に答えのある問いが投げかけられそれを適切に答えられることが求められる。しかし、自ら問いを導き出すことや決まった正解のない問題に授業の中で取り組む機会は比較的少ないかと思う。そしてこの問いを立てるということが非常に難しい。

社会の課題や話題になっているものは調べればすぐに出てくるし、近年では企業から与えられる問いに取り組む探究なども増えている。しかし、これらの問いは外から与えられている課題であって、自分の中から出てきた問いというわけではない。大切なのは自分たちの中から出てきた疑問や課題、つまり「自分事」としてとらえた問いを導き出すことで、自らの中にある興味関心と結びついた問いを引き出す練習となり、探究学習の際に大切な問いを立てる力を身に着けることにつながる。

② 新しい価値観との出会い

本学習では「考えなんて人それぞれだよな。」と考えることを放棄することは禁止している。確かに個々に考えが違うのだから考えが人それぞれなのは間違っていないのだが、今回の目的は結論を出すことではなく、対話を通じて相手の考えを引き出し共有することで、新しい価値観との出会いや発見することであり、この経験を通じて自分の考えについて、何となくとらえていた自らの価値観が整理されて自分の中の考えの本質に気が付くことを求めている。

また、自分の考えを言わないというのも一つの選択として認めている。中には、相手の話を聞きながら自分の中で新しい価値観を受け入れるという子もおり、回を重ねることで自分の考えを話すようになるという場面も多く見られる。

(3) 探究学習

いわゆる総合的探究の時間であるが、本校では「ゼミ制」を取っている。

大学などのゼミでは有識者である先生方の下で、その分野の学びを深める。

しかし、本校の「ゼミ」では特に先生ごとに探究分野やテーマは設けていない。

「それはゼミと言って良いのか」という意見もあるだろうが、探究では「自ら問を立て、自らで学びを深める力を身に着ける」ことを求めている。そのため、教員は生徒が求めている探究の答えを教える

のではなく、生徒が自ら探究できる環境を整えることが求められるのである。

実験が必要な場合はサポートも必要、アンケートが必要なら方々のゼミの先生に協力を仰いだり、外部の方に意見を求めるための段取りや、生徒の求めによっては外部へのコンテストや発表など、様々なことを求められる教員の負担も大きいですが、自ら「好きな物事について自ら問を立て探究に取り組む」ためにはとても重要なシステムだといえる。

また、学校行事の中に探究発表会が用意されており、全校生徒が3年間かけて行った探究の成果を発表する場が用意されている。この場では1年生、2年生も同席しており、3年生の成果発表が1、2年生にも大きな影響を与える。

■ 成果

(1) 質問力とコミュニケーション力の向上

目に見えて成果が出ているのが「質問力」である。

校外のイベントや市役所との意見交換、他校との交流など、様々な場面で質問や意見を求められる。この時に、1番最初に率先して質問をしたり、的を得た質問を行ったり、いろんな視点から物事をとらえて質問を行うことが出来るようになった生徒が著しく増加した。

(2) 発表の場へ積極的に出るようになった。

例えば大学主催のコンテストや学会の高校生発表などに積極的に参加するようになった。それまでコンテストは勉強ができる特定の学校が出るものという意識がみられたが、どんな場面、どんな相手に対しても物怖じせず立ち向かえるようになった生徒が増えた。

(3) 自らで企画を立ち上げる行動力の向上

特に、文化部や生徒会などで多く見られた現象で、以前まで比較的与えられたものの範囲内で活動し、自分たちで活動を広げたりすることは少なかった。だが、自分たちで活動の幅の広げようとする積極性

が増した。また方向性として、今ある大会などで上を目指すという方向より、自分たちで企画を立ち上げ自らで活動のフィールドを作り上げることを行うフロンティア精神が身についたように思える。例えば、漫画研究同好会では高校の漫画・イラスト部や大学のサークルを誘ってイラストの合同誌を企画。募集から編集、出版まで行うような活動をするようになったり、生徒会では他校の生徒会から情報収集し、互いの状況や問題を共有する研究会の企画運営を行い、科学部では自ら探究・研究発表会を主催。中学・高校・大学などを誘って研究発表の場を作り上げた。



■ おわりに

探究学習を通じ、問いを立て自ら考え表現・行動する力は、大学での学びを広げることや社会人として活躍するために求められるスキルです。そして、探究学習の効果を高めるためには多様な価値観に触れることが大切であることから複数の学校が競争するのではなく協力することが求められると考えます。この場をお借りして、部活やグループ単位などで探究活動と一緒にやることなどに興味がある方がいらっしゃいましたら、メール (chino@shoryo.ed.jp) にてご連絡いただけますと幸いです。



進化・深化する宇工 ～創る「グローバル・リーダー」～

～栃木県内で唯一の科学技術高校として、グローバル（国際的）な視点を持って、ローカル（地域）社会を牽引するエンジニアを育てていきます～

■ はじめに

本校は、「豊かな人間性、確かな技術・技能を身につけ、将来の産業界を担う技術者を育成する」を教育目標として、ものづくりを通じた人づくりを実践しております。

これまでの諸先輩方が「京町」で築いてきた宇都宮工業高校の歴史と伝統の上に、平成23(2011)年4月に、ここ「雀宮」に移転し新しいタイプの工業高校「科学技術高校」として新たに歩み出しました。本県の工業教育の基幹校として次代の産業界を支える人材を育成するという役割を担うとともに、全国トップレベルの施設・設備と先進的教育内容により全国に範を示す工業高校となるよう教職員一同取り組んでおります。

令和5年度には創立100周年を迎えることができ、次の100年に向かって、生徒・保護者・地域の皆様から愛され信頼される「宇工」を目指して、さらに「進化」・「深化」を続けます。

■ 教育目標

豊かな人間性、確かな技術・技能を身につけ、将来の産業界を担う技術者を育成する

■ 教育の特色

「ものづくり教育」・本県産業の将来を担う技術力に対応できる人材の育成

- 企業レベルの先端的な設備を活用した実習・地域企業や大学と連携した外部講師による講話
- 高度な資格試験や各種技能検定への挑戦・高校生ものづくりコンテスト、各種競技大会への積極的な参加

「環境教育」・工業人としての倫理観等の育成

- 環境教育活動を通じた技術者としての倫理観の育成
- 人に優しく地球環境に優しいものづくりができる技術者の育成

「継続教育」・大学進学等の継続教育への対応

- 数理英の授業時間を確保した進学類型の設置
- 進学課外授業（数学・理科・英語）の実施

■ スクールミッション・スクールポリシー

スクールミッション

ものづくりに関する実践的・協働的な学習活動を通して、将来の産業界を担うスペシャリストを育成する学校

スクールポリシー

- ① グラデュエーション・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針）
 - コミュニケーション能力と専門性を高め、思考力や創造力を育成します。
 - 地域産業の振興や社会貢献に主体的かつ協働的に取り組み、課題解決力を育成します。
 - 自らの進路実現に向け主体的に取り組む自己調整力を育成します。
- ② カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）
 - 充実した施設・設備やICTを活用し、専門性の高い授業・実習を実施します。
 - 地域産業界と連携し、勤労観や職業観を養う実践的なキャリア教育を実施します。
 - 就職や進学に対応した柔軟な選択科目を設定し、個々の生徒の進路に応じた学びを実施します。
- ③ アドミッション・ポリシー（入学者の受入れに関する方針）
 - ものづくりに興味・関心があり、将来は産業界でのスペシャリストを目指す生徒
 - 最先端の科学技術に興味・関心があり、進路実現に向け専門性を高める学習に意欲的に取り組む生徒
 - 生徒会活動、部活動、ボランティア活動に積極的に取り組む生徒

■ 教育の体制

（1）施設・設備

本校は、平成23年4月、本県産業の将来を担う人材の育成を目指した「科学技術高校」として開校しました。授業では、新たに導入された先端機器の活用や、一人に一台の機器が整備されるなどの学習環境の中、実習など工業技術教育に取り組んでいます。さらに、320名が収容できる大講義室では、課題研究発表や科学技術に関する外部講師による講義が行われます。

校庭には、400mトラック、サッカー兼ラグビーコート、野球グラウンド、テニスコート4面、ハンドボールコートが整備され、その他、第1体育館、第2体育館（柔道場、剣道場）、プール、弓道場があり、

生徒は授業や部活動（運動部 16 部、文化部 16 部）に励んでいます。

（2）コース（学科）別と類型別の学習

技術の高度化や複合化に対応できる人材育成を目指し、4系7学科（11コース）を設置しています。

入学者は「系」で募集し、1年次は工業技術の基礎・基本を学びます。2年次からは選択した「コース（学科）」で専門性を深める学びを行います。また、進路希望に応じて、大学進学に向けた「進学類型」と専門科目を深く学ぶ「専門類型」を選択します。3年間を通じて、工業技術を広く理解した上で専門分野の知識や技術・技能を身につけ、一人一人の進路実現を確実に図っています。（別表参照）

■ 各系の目標

（1）機械システム系

機械技術について幅広く学び、機械の設計や製造、メカトロニクス等に関する知識や技術・技能の習得を図り、機械の設計や製造、ITとFAの管理などを担う機械技術者を育成します。

【資格・検定】

2・3級技能士（機械加工、機械検査作業、電気機器組立）2級ボイラー技士 ガス溶接技能講習など

（2）電気情報システム系

電気や電子、情報技術について幅広く学び、電気や電子、情報ネットワーク等に関する知識や技術・技能の習得を図り、電気設備の設計や保守、電子回路や制御、情報通信などを担う電気・電子・情報ネットワーク技術者を育成します。

【資格・検定】

第1・2種電気工事士 工事担任者 第一級・二級デジタル通信 2・3級技能士（情報配線施工）など

（3）建築デザイン系

建築や住環境デザインについて幅広く学び、設計や施工、建築デザイン等に関する知識や技術・技能の習得を図り、建物の設計、施工等を担う建築技術者を育成します。

【資格・検定】

2級建築施工管理技士 2・3級技能士（建築大工）など

（4）環境建設システム系

自然環境や生活環境、建設技術について幅広く学び、建築設備や土木構造物の計画や設計、施工等に関する知識や技術・技能の習得を図り、建物や社会基盤システム構築を担う建築設備技術者や土木技術者を育成します。

【資格・検定】

23級技能士（建築配管） 2級管工事施工管理技士 2級ボイラー技士 消防設備士測量士補 2級土木施工管理技士 甲種火薬類取扱保安責任者 小型車両系建設機械特別教育など

■ 進路状況（令和6年度）

就職者数：民間企業 200名（県内 112名、県外 88名）、公務員 14名 合計 214名

進学者数：大学 63名、高専・能開大 6名、産技校・専門学校等 23名 合計 92名

（求人社数：1220社（工業に関する求人）、求人数 2010名）



キャリア形成支援事業



宇工祭（学校祭）



校舎全景



体育祭

1年次(4系)		2・3年次(7学科11コース) + 類型選択		
系	定員	学科	コース	定員
機械システム系	120名 3学級	機械科	機械技術コース	40名 1学級
			機械エネルギーコース	40名 1学級
電気情報システム系	80名 2学級	電子機械科	電子機械コース	40名 1学級
			電気科	電気エネルギーコース
		電子情報科	電子コース	20名
			情報ネットワークコース	20名 1学級
建築デザイン系	40名 1学級	建築デザイン科	建築技術コース	20名
			住環境デザインコース	20名 1学級
環境建設システム系	80名 2学級	環境設備科	環境設備コース	40名 1学級
			環境土木科	土木施工コース
		土木設計コース		20名 1学級

別表

令和6年度・7年度の活動について

令和6年度

■ 令和6年度事業報告

- ・4月10日 事務局打合せ
役員会に、総会の会場開催とオンライン配信、講演会講師、会報発行、教職校友会枠推薦調整会議日程、交流会（懇親会）の再開などを提案することを確認した。
- ・4月26日 役員会
総会および講演会の会場開催とオンライン配信、交流会（懇親会）の開催、会報44号の発行、教職校友会枠推薦の実施、名簿整理の実施などを決定した。
- ・6月22日 令和6年度総会および講演会
総会を会場開催およびオンライン配信し、東京電機大学システムデザイン工学部長前田英作教授による講演会「人工知能の現状と未来」を開催した。
- ・7月8日 会報44号の発行
会報44号を発行した。

教職校友会枠推薦入試制度への協力

- ・9月6日 教職校友会枠推薦調整会議
全国19校から応募があり、33名の推薦を承認した。入試センターを通じて各学部でも承認され、33名全員が出願し合格した。

■ 令和6年度会計報告ならびに会計監査報告

令和7年6月28日

令和6年度 東京電機大学教職校友会 決算報告

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	554,746	会議費	24,578
会員会費	83,915	事務経費	17,292
雑収入	30,000	予備費	0
		次期繰越金	626,791
合計	668,661	合計	668,661

一般社団法人東京電機大学校友会から推薦入試関連、講演会講師謝礼の援助をいただいています。

会計幹事 森田 訓敏
後藤 真理子

厳正に監査し、相違ないことを認めます。
令和7年4月1日

会計監査 荒 葉 勝 夫
大田 智 雄

令和7年度

■ 令和7年度事業計画

- ・総会および講演会開催
総会および講演会の開催を計画する。
総会・講演会は会場参加が叶わない会員のためオンライン配信を計画する。
- ・交流会の開催
総会開催に合わせ、昨年度好評だった交流会（懇親会）を開催する。
- ・令和7年度会報（第45号）の発刊
会報は各支部や会員等に協力を要請し、読み物としての充実を図る。
特集記事のテーマは「学校紹介・教育実践紹介」とする。
- ・会員情報調査・メールアドレスの収集
随時情報収集に務める。
- ・支部活動への協力
各支部の総会開催などに協力する。
- ・教職校友会枠推薦入試制度への協力
例年通り実施する。
- ・役員会・事務局打合せの開催
事業の計画・実行のための会議・打合せを随時開催する。

■ 令和7年度予算（案）

令和7年度 東京電機大学教職校友会 予算(案)

(令和7年4月1日より令和8年3月31日まで)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	626,791	会議費	30,000
会員会費	70,000	事務経費	20,000
雑収入	30,000	予備費	676,791
合計	726,791	合計	726,791

このほか、東京電機大学校友会、東京電機大学からの援助が予定されています。

令和7年度 顧問・役員・幹事一覧

* 随時確認しておりますが、情報不足のための誤りを危惧しています。情報をお寄せください。(編集担当)

顧問	学校法人東京電機大学理事長 東京電機大学学長 一般社団法人東京電機大学校友会理事長 (元)群馬県立伊勢崎工業高等学校長 (元)群馬県立藤岡工業高等学校長 (元)山形県立長井工業高等学校長 (元)東京都立港工業高等学校長 (元)神奈川県立神奈川工業高等学校長 (元)埼玉県立春日部工業高等学校長 (元)福島県立小高工業高等学校長 (元)東京都立練馬工業高等学校長 (元)東京電機大学高等学校教頭 (元)東京都立府中工業高等学校長 (元)国立東京工大付属工業高等学校副校長 (元)東京都立武蔵野北高等学校長 (元)群馬県立高崎工業高等学校長 (元)東京電機大学中学校・高等学校長 (元)関東第一高等学校長 (元)神奈川県立神奈川工業高等学校長 (元)東京都立多摩工業高等学校長 (元)福島県立小名浜高等学校長 (元)福島県立湯本高等学校長 (元)静岡県立静岡工業高等学校長 (元)関東第一高等学校長 (元)東京電機大学高等学校教頭 (元)埼玉県立久喜工業高等学校長 (元)静岡県立藤枝北高等学校長 (元)埼玉県立騎西高等学校長 (元)茨城県立日立工業高等学校長 (元)神奈川県立神奈川総合産業高等学校副校長 (元)山梨県立谷村工業高等学校長 (元)東京都立蔵前工業高等学校長 (元)東京電機大学高等学校教頭 (元)尚志高等学校副校長 (元)群馬県立桐生工業高等学校校長 (元)東京都調布市立第四中学校長 (元)東京電機大学中学校・高等学校長 (元)埼玉県入間市立藤沢中学校長 (元)神奈川県立商工高等学校副校長 (元)東京都立足立工業高等学校副校長 (元)東京都立蔵前工業高等学校長 (元)山梨県立甲府工業高等学校校長 (元)埼玉県立大宮工業高等学校長 (元)東京都立工芸高等学校長 (元)千葉県立京葉工業高等学校 一般社団法人東京電機大学校友会事務局長	渡辺 貞綱 射場本 忠彦 森戸 義美 町田 峯勝 中曾根 喬 山口 康夫 村上 尚 久保倉 清 星野 時二 井上 精三 小池 敏男 中村 隆一 平林 洋志 青木 輝寿 小原 政敏 加藤 通順 高久 廣毅 吉村 正昭 梅田 政勝 橋本 三男 田仲 敏晃 辺見 広一 佐藤 義雄 池田 二郎 見崎 正行 新井 誠 山口 房夫 廣瀬 成一 高畑 啓治 平野 隆士 教野 均 豊田 善敬 津村 栄一 網田 雄治 樋口 高則 藤倉 正道 向芝 京太 佐藤 文憲 櫻場 博 瀧澤 龍司 三神 幸男 手塚 幸樹 清水 雅己 杉浦 文俊 森本 圭一 友常 岳浩	会長 東京都立雪谷高等学校長 副会長 栃木県立那須清峰高等学校 茨城県立勝田工業高等学校 東京都立北豊島工科高等学校長 埼玉県立狭山工業高等学校長 (元)東京都立工業高等専門学校教授 神奈川県立向の岡工業高等学校教頭 山梨県立都留興譲館高校 (元)静岡県立科学技術高等学校校長 千葉県立京葉工業高等学校 幹事 神奈川県立磯子工業高等学校 東京電機大学中学・高等学校 東京電機大学中学・高等学校 庶務幹事 東京都立北豊島工科高等学校 埼玉県立狭山工業高等学校教頭 千葉県立千葉工業高等学校 会計幹事 東京都立墨田工科高等学校 東京都立六郷工科高等学校 会計監査 東京都立足立工科高等学校主幹教諭 東京都立六郷工科高等学校 特別会員 (元)千葉県立清水高等学校 (元)静岡県立清水工業高等学校教頭 (元)神奈川県立向の岡工業高等学校教頭 (元)東京電機大学高等学校 (元)羽黒高等学校教頭 (元)静岡県立浜松工業高等学校教頭 (元)千葉県立京葉工業高等学校 (元)栃木県立真岡工業高等学校 (元)山梨県総合教育センター副所長 (元)読売東京理工専門学校 (元)大森学園高等学校	丸茂 聡 高松 秀和 藻垣 祐郎 荒 繁勝 田中 克典 前田 治 嶋村 圭一 田中 祐司 松村 照司 中村 啓介 小室 卓也 河野 吉伸 米山 裕 渡邊 博之 高橋 勉 清崎 起代則 森田 訓敏 後藤 真理子 大田 智雄 河野 恒義 石渡 祥照 大越 和夫 河本 一利 前嶋 万人 松田 弘義 松本 恒彦 山本 義彦 小堀 英雄 有泉 淳 松下 祐輔 加藤 三郎 渡邊 博之 高橋 勉 清崎 起代則 向芝 京太
----	--	---	---	---

令和7年度 教職校友会会員数 都道府県住所別 学校種別分類

	OB	高校	養護	中学	小学	高専	専門学校	その他	大学	短大	非常勤	計
北海道	3	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
青森県	3	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	8
岩手県	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
宮城県	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
秋田県	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
山形県	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
福島県	9	15	0	6	0	0	0	0	0	0	1	31
茨城県	14	23	2	7	1	2	0	1	1	0	0	51
栃木県	7	14	0	5	0	0	0	1	0	0	0	27
群馬県	13	20	0	8	0	0	0	0	0	0	1	42
埼玉県	83	118	4	50	3	0	5	2	1	0	10	276
千葉県	79	49	1	20	0	0	0	4	0	0	0	153
東京都	90	116	6	22	0	2	5	2	1	0	2	246
神奈川県	58	42	0	15	1	0	0	1	0	0	1	118
新潟県	4	6	1	2	0	0	0	0	0	0	0	13
富山県	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
石川県	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
福井県	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
山梨県	6	11	0	2	0	0	1	1	0	0	0	21
長野県	5	5	1	7	0	0	0	0	0	0	0	18
岐阜県	1	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	5
静岡県	22	16	0	10	0	0	1	0	0	0	2	51
愛知県	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
三重県	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	6
滋賀県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
京都府	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
大阪府	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
兵庫県	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3
奈良県	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
和歌山県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
鳥取県	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
島根県	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
岡山県	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3
広島県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
山口県	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
徳島県	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
香川県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
愛媛県	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
高知県	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
福岡県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
佐賀県	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
長崎県	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
熊本県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大分県	4	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6
宮崎県	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
鹿児島県	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
沖縄県	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
その他	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
計	451	464	16	172	6	5	14	13	3	0	18	1162

65歳を超えた方はOBとして集計してあります。65歳以前に退職された方、65歳を超えて現職の方はご連絡ください。

東京電機大学教職校友会 会則

第1条 本会は、東京電機大学教職校友会と称し、昭和43年8月1日設立。事務局を東京都足立区千住旭町5番におく。

第2条 本会は、学校法人東京電機大学及び、一般社団法人東京電機大学校友会と緊密に連繋し、その発展に協力し、会員の資質の向上と親睦をはかることを目的とする。

第3条 本会は、次の会員をもって組織する。

- 一、正会員 東京電機大学の経営する各学校の卒業生で、現に小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、盲・ろう・養護学校、高等専門学校、専修学校、その他の教育機関に勤務する者。
- 二、特別会員 本会の趣旨目的に賛同する者で役員会の承認を得た者。

2. 本会に次の顧問をおく。

- 一、東京電機大学の経営する各学校の学長および校長。
- 二、本会に特に功労のあった者で、役員会が推薦する者。

第4条 本会に次の役員をおく。ただし任期は2年とし、再任を妨げない。

会 長	1名	副会長	若干名
幹 事	若干名	庶務幹事	2名
会計幹事	2名	会計監査	2名

2. 会長及び副会長は会員のうちから役員会が選出する。
3. 幹事は各支部ごとに支部長の推薦するものとする。

第5条 会長は、本会を代表し会務を総理する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は会長の職務を代行する。
3. 役員および幹事は、会長の命を受けて会務を処理し、会計監査は会計を監査する。

第6条 本会の会合は、次のとおりとする。

- 一、総会 毎年一回開き、会務報告その他必要事項を審議する。
- 二、役員会 必要に応じて会長が招集し、会

務を処理する。

- 三、その他の会合 会長が必要と認める場合は、前二号以外の会合を召集することができる。

第7条 本会の目的を達成するための経費は会費、補助金および寄付金による。

2. 会費は、正会員1名につき年額1000円とする。ただし、会長が特に必要があると認める時は役員会にはかり、臨時会費を徴収することができる。
3. 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第8条 第8条 この会則は、総会において出席会員の過半数の同意により変更する事ができる。

1. この会則は、昭和43年8月1日より施行する。
2. 本会の運営のために必要な細則は役員会にはかり、会長が別に定める。
3. 昭和47年2月20日 会則の一部を変更し、施行する。
4. 昭和48年6月11日 会則の一部を変更する。
5. 昭和50年3月31日 会則の一部を変更する。
6. 平成6年12月10日 会則の一部を変更する。
7. 平成8年6月22日 会則の一部を変更する。
8. 平成27年6月22日 会則の一部を変更する。

【申合せ事項】

1. 本会の目的を達成するため、都、道、府、県に都道府県支部会を設ける事ができる。各支部会の会則は、各支部において別に定める。
2. 各支部会は都道府県の支部長を長とし、必要に応じ支部会内に役員を設け、支部会の事業を行うものとする。支部長は本会の副会長とする。
3. 本会が全国組織の会であるため、総会に多数の出席が困難と予想されるときは、役員会の原案を書面連絡で審議して決定することができる。

令和7年7月

会員各位

東京電機大学教職校友会

会費納入のお願い

会員の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。皆様には日頃より東京電機大学教職校友会の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、本会は、教職に携わっていらっしゃる卒業生のなかで事務局が把握できた方々を会員とさせていただいている組織です。したがって、必ずしも皆様の入会意思を確認させていただいたり、申込み手続きによる処理などをとることはいたしておりません。しかし、全国各地の教壇で活躍される卒業生は、母校にとって大切なネットワークであることから、学校法人東京電機大学および一般社団法人東京電機大学校友会は、本会の活動に対して大きな期待を寄せております。教職校友会の活動は、微力ながらも母校東京電機大学および東京電機大学校友会と一体となり、学園発展への一助をなすものと確信しております。

本会の活動に当たっては、学校法人東京電機大学および一般社団法人東京電機大学校友会より多大の援助を頂いてはおりますが、この度は年会費の振込用紙を同封させていただきました。会費の納入は会員の皆様にご無理をお願いするものではございませんが、教職校友会の趣旨をご理解いただきまして、多くの皆様にご協力を賜りたくお願い申し上げます。年会費は1000円となっております。

なお、自動引落として年会費を納入して頂いている皆様にも、発送手続きの処理上、振込み用紙を同封いたしました。失礼の段お詫び申し上げます。

末筆でございますが、会員の皆様のますますのご活躍をご祈念申し上げます。

令和7年度 会報 第45号

発行日 令和7年7月8日

東京電機大学教職校友会

事務局 一般社団法人東京電機大学校友会内

〒120-8551

東京都足立区千住旭町5番 東京電機大学 1号館2階

電話番号 03-5284-5140

FAX番号 03-5284-5187

eメール kouyukai@jim.dendai.ac.jp

郵便振替口座 00100-4-71400